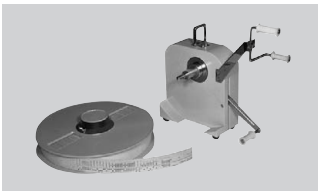


COLUMN

表紙掲載製品：

テープワインダー Tape winder 1965年



1960年代、当社の主力製品であった通信用電源は、無停電電源装置・手回発電機・信号度数計用電源装置を中心に、手堅い伸びを示していた。

また、サーボモータ・レゾルバなどの回転機器も、米国での販売が本格化したこと、このころ普及していった電算機の周辺機器としての国内需要が広がってきたことから、急速に需要を増やしていた。

電子計算機用電源の定周波定電圧装置・ホットトップなどの自動制御装置・エンジンジェネレータ・ブーリーモータなど、この頃手がけていた製品の需要も堅調であった。

このように従来製品が好調に伸びていくなかで、当社は次々に新製品を打ち出していた。これより前から狙いとしてきたのは、今でも重要な市場である、通信（コミュニケーション）・情報処理（コンピュータ）・制御（コントロール）の3分野で、「3C」と呼ばれていた。特に1960年代後半からは、この分野へ向けた新製品が際立っている。

そのなかで、「C」のうち情報処理の分野、すなわち電子計算機の関連機器といえるものが1965年に開発したテープワインダーである。当時の電子計算機は入出力に紙テープを用いていた。現代で言うDVDやハードディスクの役割を紙テープがおこなっていたのだ。テープワインダーはその紙テープを自動的に巻き取る機械で、回転

部に小型2相サーボモータが使われていた。

電子技術の進歩に伴い高性能化してきた電子計算機は、1960年頃から徐々に普及しはじめ、1965年を迎える頃には「情報革命」の言葉とともに、各企業に導入されていった。そして事務処理に、管理業務に、また経営の意思決定にまでも活用されるようになった。

電子計算機は、記憶部・演算部・制御部よりなる中央処理装置と、入出力装置・回線制御装置などよりなる周辺装置から構成されていた。入出力装置は特に多様化され、紙テープの読み取り装置・プリンタ・ブラウン管表示装置・磁気テープ・ドラム・ディスク装置などさまざまな機構が存在していた。

これらの装置は各種の回転機を使用していたので、電子計算機の急速な普及は、当社にとって製品販売の拡大に向けて大きな期待を抱かせるものだった。関連装置の製品化に熱意が高まり、このテープワインダーの後も、1968年に紙テープの繰り出し装置であるテープハンドラ、1969年にデータを読み取るテープリーダを開発した。これらは電子計算機の需要拡大にともない好評を博し、コミュニケーション分野に対する当社の貢献を強固にした製品群である。

参考文献

「ひらけゆく情報化社会のパイオニア 山洋電気」山洋電気株式会社 ダイアモンド社